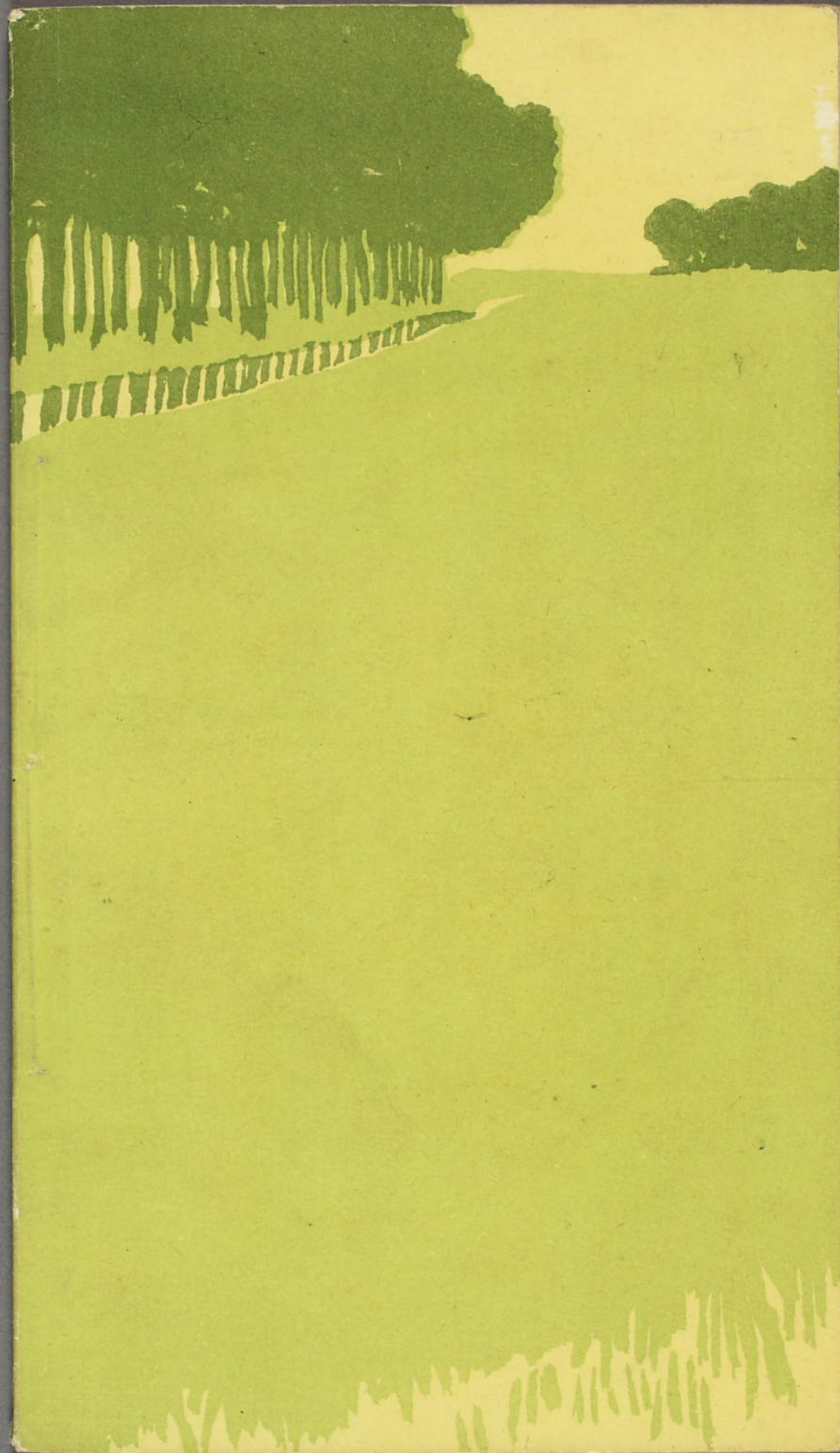
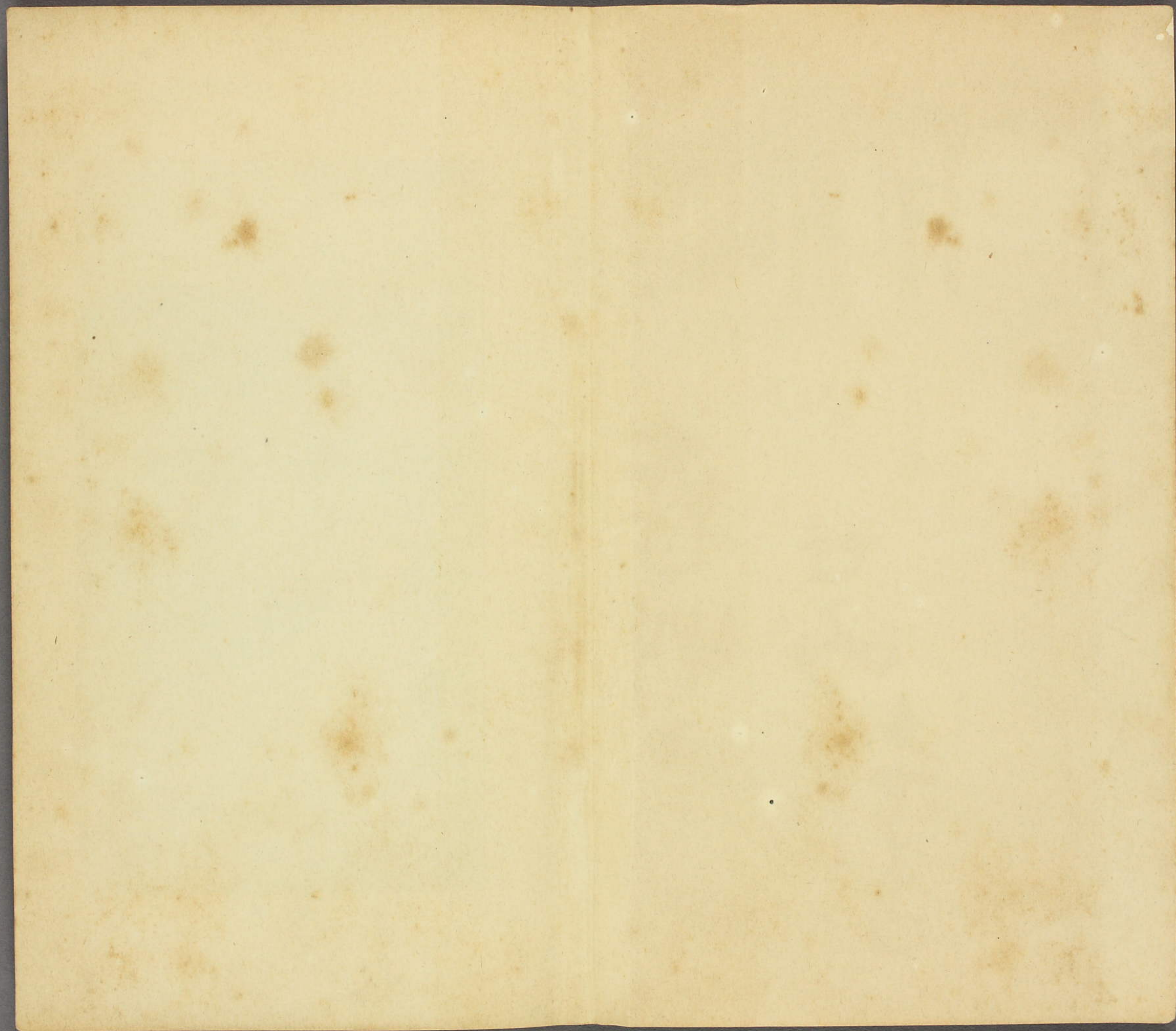


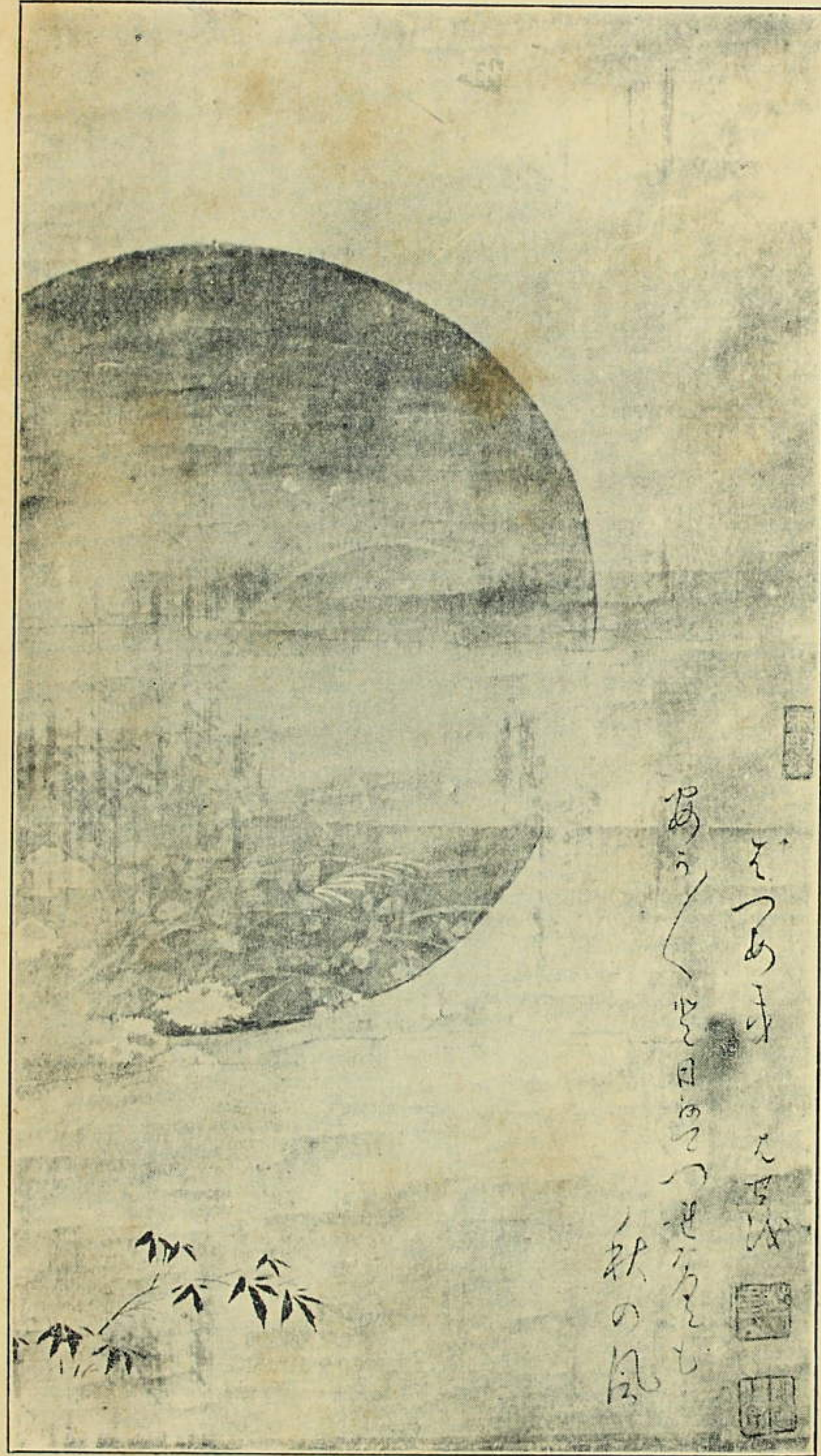
替
 子
 三
 二
 中
 子
 記











あつあつ
と日あつせり
秋の風

蕉 芭

月と女との為舞出と舞

村 燕

規子

規子

せみしぐれ目次

雲夏夏夏夏薫青夕五五梅涼暑短卯
の の 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
峰川野山月風嵐立晴雨雨 夜月

七六六六六五五四四四四三二一一
水綿裕更川鉾競祭菖粽幟藥甘草清
無 月 拔 衣 社 馬 蒲 摘 茶 水
い され

三三二〇〇〇〇九九九八八八七
晒早納晝夏夏夏簞團扇竹夏掛羅帷
井 苗 涼 寢 花 晝 敷 扇 人 織 香 子
座 婦 羽

五五四三三三三三三三三三三三三三

夕 晝 蓮 茨 桐 水 柿 風 花 芥 山 葵 紫 牡 夏 百 橘
の 室 の 柘 梔 陽
顔 顔 花 櫻 花 蘭 榴 子 子 花 丹 菊 合

三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

秋 雜 釣 水 麻 筍 踏 夏 浮 河 若 葉
近 葱 飯 草 草 骨 竹 柳

三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

蝶 青 閑 時 紗 鮮 心 蕘 青 海 竹 舟 麥 鷓 川 藻 雨
古 月
蝠 鷺 鳥 鳥 太 酒 簾 取 植 遊 飼 狩 刈 乞

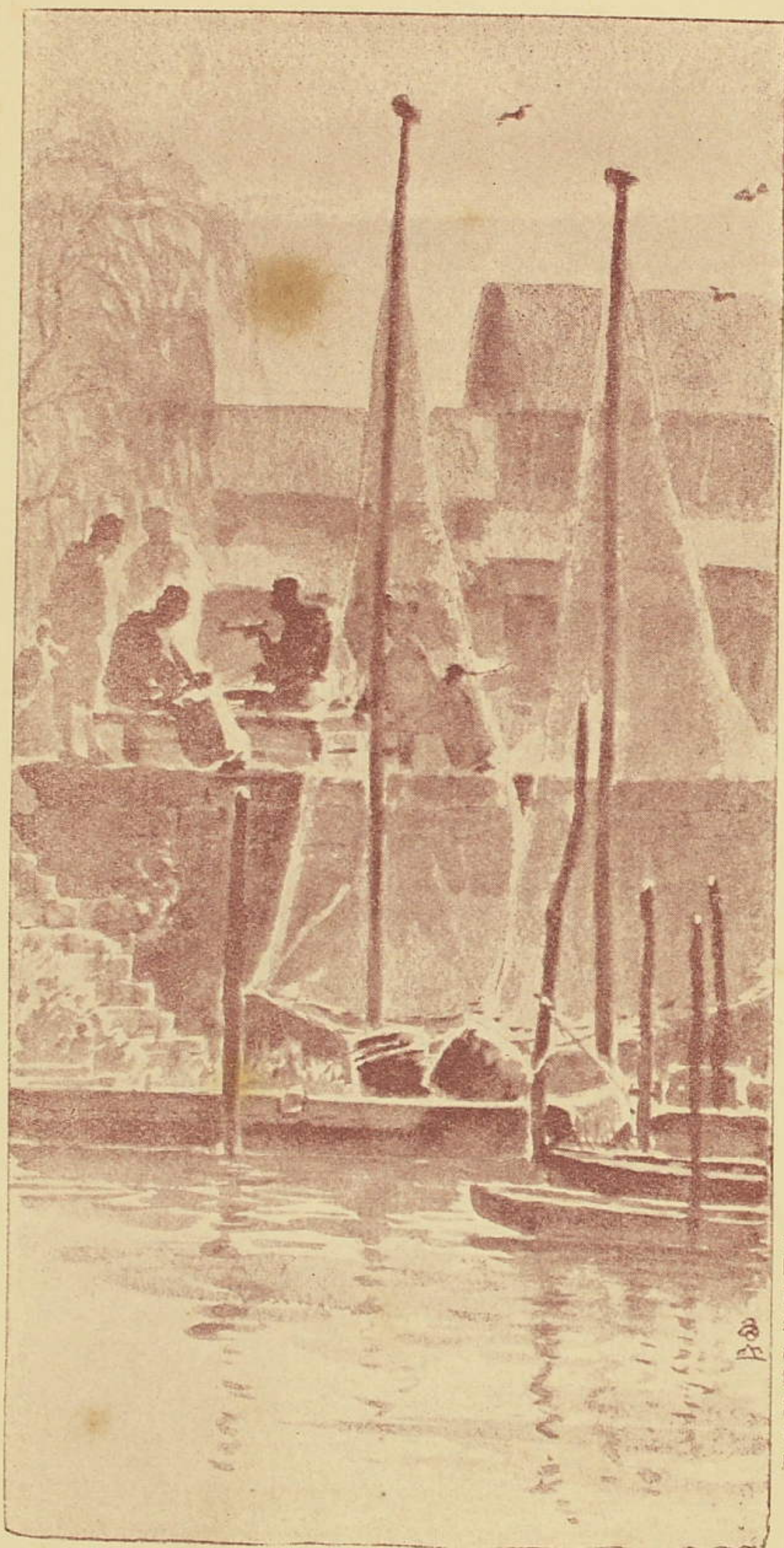
三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

霍 夏 雷 蚯 蛭 枝 蟬 毛 子 蚊 繭 火 螢 初 鮎 水 水
取
亂 霞 出 翠 蛙 虫 子 虫 經 馬 鷄

三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三

杜 殘 茂 若 木 夏 若 凌 常 缸 茄 瓜 林 杏 實 青 鹿
下 木 宵 磐 木 落 葉 の
若 花 楓 閣 立 葉 花 葉 豆 子 檜 櫻 梅 子

三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三



大阪國文社製版印刷

せみしぐさ

卯

月

鳩鳴て曇り勝なる卯月哉

四

明

卯月寒し佛の花を賣りに來る

吳

山

短

夜

短夜や納豆作る寺男

香

墨

明けやすき夜の点滴や白丁花

同

短夜の宵時つぐるブラマ哉

同

明け易き夜を辻番の偷み釣

四

明

追剝に逢はず峠の明易き

露

月

短夜を護摩の烟の残りけり

墨

水

暑

短夜や虎が出でたる町の中
 卯の花に短夜あけぬ裏の辻
 短夜や大井ふり越す通り雨
 短夜の明けて萌黄の蚊帳哉
 狐追ふ夜戸出の島や明け易し
 短夜の瀛車行く音や上根岸
 短夜や明け残りたる湯殿の灯
 雑貨多き廣東店の暑さ哉
 さばてんの垣にはこりの暑さ哉
 巡査補の服の着ざまの暑さ哉
 麻に降る日中の雨や鄙暑し

稻 青
 六 花
 鳥 不 關
 樂 南
 古 泉
 石 泉
 南 窓
 香 墨
 同 同
 同 同
 虚 子

涼

蟬壳を蟻の引き去る暑さ哉
 立枯れの松照りつける暑さ哉
 涼しさや活けたる花の屑多き
 撫子を束ねて涼し花の露
 このわたの涼しく咽を泣りけり
 鬼の面脱げば涼しき美男哉
 尺の萩涼しき風の渡るかな
 朝貌の行燈すゞしや夜の市
 五盞皆空なるからに涼しさよ
 芭蕉葉に朝雲涼し山の坊
 涼しさの月や紙帳を這ひ出でぬ

別 天 樓
 少 狂
 橡 面 坊
 同
 鳴 雪
 虚 子
 牛 伴
 露 石
 北 涯
 竹 の 門
 翠 浪



梅 雨

五月 雨

五月 晴
夕 立

夕立や馬ひき入る、寺の門	夕立に漂母が麥の漂ひぬ	松赫と夕榮すなり五月晴	五月雨に薔薇の挿芽腐りけり	五月雨や石に花さく神の庭	五月雨や蟹這ひ上る河岸の椽	離々として草五月雨る、垣根哉	背水の陣をしきけり五月雨	梅雨晴や柱をのぼる大百足	印を刻す梅雨の窓や蝸牛	梅雨に入る紅一点の躑躅哉
同	一	牛	田	不	田	香	繞	愚	紫	牛
	蓑	伴	庭	動	千	墨	石	哉	影	伴

青 薰

嵐 風

夕立や熊坂が胸毛ぬるゝ程
 片照るや夕立過ぐる橋の西
 晚涼や夕立晴れの山の色
 夕立や端居はのめく乙の君
 夕立や人寄せつけぬ放れ馬
 夕立に戸をくる樓の女かな
 夕立の百雷近し板ひさし
 市暗澹夕立んとして犬も見ず
 引き立つる小馬の耳や青嵐
 歩を移す人や薫風第一橋
 明け放つ大手の木戸や風薫る

露 月 牛 伴 翠 浪 由 人 南 子 不 動 君 郎 ち 江 の 牛 伴 田 千 畝



夏 夏
川 野

八戒の晝寢してゐる夏野哉
鱸赤き小魚見えけり夏の川

四 稻 竹
明 青 門

夏 夏
山 月

風薫る素袍の袖や仕手柱
夏の月黄金佛を綱し得たり
擊劍や浴舎の庭の夏の月
夏の月浅茅の露に歩む也
夏山や飛流直下の大瀑布
鳥啼くや隠々として夏の山
葉がくれの白糸艸や夏の山

露 同 把 松 由 田 薫
石 栗 濱 人 千 水

越中吳羽山

夏山や神通川を目の前に

竹の門

雲の峰

清水

夏川や桶に入れたる晒布
 夏川を泉水にひく庭廣し
 夏川にかゝれば馬の急ぎけり
 田舎路や夕立つあとの雲の峰
 雲の峰山のうしろに高き哉
 雲の峰河童の水も涸れぐに
 蒲の穂に風そよぐ也雲の峰
 一勺の清水に結ぶ庵哉
 岩蔭に細く流るゝ清水哉
 七曲り箱根は險し山清水
 先づたのむ樹蔭もありて苔清水

把 由 少 虚 把 獅 其 把 同 繞 同
 栗 人 狂 子 栗 子 雪 栗 石

草いきれ
甘茶
薬摘
幟

麓から十八町の清水かな
炭焼の米洗ひゐる清水哉
石を引く牛の喘や草いきれ
天竺のなんのかんのと甘茶哉
薬つめば薬を鹿の舐りけり
むかひ腹に公達多き幟かな
香具山の麓ゆかしき幟哉
木かくれに大原の里の幟哉
幟たてん口なしの花の雨のひま
末の世の庶人に伍する幟哉
學校の窓から見ゆる幟かな
別天樓
翠浪
紫影
芙蓉
露月
紫影
格堂
抱琴
笠堂
其侯

粽
菖蒲

祭

兼平を舅にもちて幟哉
穢多村の大金持や初幟
先代の乳母もきて巻く粽哉
菖蒲ふく某院の雑仕かな
南天の日蔭に瘦せて花菖蒲
上根岸三島神社祭禮四句
この祭いつも卯の花くだしにて
引き出す幣に牡丹の飾り花車
不消化な料理を夏の祭かな
氏祭これより根岸蚊の多き
加茂川に祭の馬を洗ひけり
むな女
菊枝
紫影
同人
由人
子規
同
同
同
烏不關

競馬

韓人の烟管くわへて祭哉
 蘆毛より栗毛は早し競馬
 我前に来て見定めぬ競馬哉
 一人落ち二人落ちたる競馬哉
 目うつりや銚ねたりゆく銚の兒
 二の銚の來るよとばかり心太
 川社更けて尿する人は誰ぞ
 衣更てつんつるてんの小厮哉
 更衣川原蓬の露をふむ
 琵琶を抱く膝の廣さよ更衣
 梅檀の花さく朝や更衣

南子
 子規
 同
 竹の門
 虚明
 烏人
 鳴雪
 紫影
 碧梧
 格堂
 香墨

川社
更衣

拾

學匠の衣更へたる木履かな
 蚕豆の莢むく妻や更衣
 つくばふて人のうわさや更衣
 衣更て右足よりす小厮哉
 衣更てお通も來る連歌哉
 山椒の花ちる朝や更衣
 更衣錢屋五兵衛が舟歌も
 身輕さに草の手入や初拾
 卷藁や弓ひく人の初拾
 拾着ていそがし振の人去來
 鯛さげて禰宜の供する拾哉

笠堂
 咲青
 石泉
 ちの
 黒洲
 其雪
 烏人
 五工
 一蓑
 古泉
 薰水

綿 拔
水 無 月
帷 子
羅 香
掛 香
夏 羽 織
竹 婦 人
扇

綿 抜いて古禪にくりけり
水 無月や京洛中の鬼の沙汰
帷 子や白菊丸は鐵漿つけて
羅 や雨玉階にそぐ夕
掛 香や机に榮華ものがたり
掛 香や遊女となり姉妹
商 人の白き腕や夏羽織
もの古りてよにありあけの竹奴哉
棕 櫚の風芭蕉の風や竹婦人
江 戸役者を團扇と誹り京扇
我 書て我はめてゐる扇かな

北 涯
碧 梧 桐
鳴 雪
露 月
露 石
竹 の 門
繞 石
逸 夢
咲 青
碧 梧 桐
石 泉

團 扇
簞 敷
夏 座 敷
夏 書
夏 花
晝 寢

破 れては骨露はるゝ團扇哉
腰 折れの歌腰抜けの團扇哉
繭 買ひの忘れて行きし團扇哉
夏 瘦 せの臙 冷かに簞
夏 座敷六尺の身を伸ばしけり
つゝましく几帳の蔭の夏書哉
夏 書して芥子の坊主の思ひ哉
玻 璃瓶に白き薔薇を夏花哉
晚 鐘に起きよ大津の晝寢人
十 哲の晝寢孔子の留守居かも
晝 寢する鶉飼の村や瓜の花

把 栗
碧 梧 桐
香 墨
鱸 江
北 涯
紫 人
同
同
紅 綠
墨 水
同

納涼

臥しわびて枕さだめぬ晝寢哉
 蓮の香に涼しすぎたり晝寢起
 寺の椽漫りに人の晝寢哉
 閑古鳥温泉の町の晝寢哉
 調度皆涼しき家の晝寢哉
 衝立の彼方に沙彌の晝寢哉
 夕納涼支廳の門を通りぬけ
 夕納涼乞食寮を覗きけり
 京一夜納涼芝居の狎校書
 店先や柿壺の徒の涼みぬる
 鴛鴦を月に遠目や納涼殿

同
 同
 橡面坊
 由人
 鱸江
 楓里
 香墨
 同
 碧梧桐
 墨水
 秋星

早苗 晒井

門すいみ尻を並べて床几哉
 投げてある小田の早苗や幾束
 晒井の庭や青梨たわゝ也
 晒井や泥に交りて鮎一尾

青士樓
 鳴雪
 獅子
 黒洲

直訴人續出

雨乞 藻刈 川狩

雨乞や又現はれし白き虹
 舟遠く藻を刈る浪や鷺の足
 魚につく狐追ひやる夜河哉

露月
 紫人
 破笛

三軒家

枕邊や夜振の人の小私語
 蝙蝠の松明よぎる夜振哉

虚明
 南窓

麥 鶉

飼

菽雀の巢に篝ちる夜振哉
 舟篝荒鶉の思ひ燃しけり
 買臣が錦に麥の埃かな
 つれづくに麥の粉はねておはしけり
 一八は屋根に開きて麥の秋
 草の戸の蚊やり見ゆるや穂麥越し
 墓原に穂に出し麥や草まぎれ
 麥を刈る人皆周の言葉也
 麥刈の一ト夜は拜め室の君
 寺々に佛生れて麥熟す
 潮浴びの裸歩きや麥畑

烏 人
 虚 明
 鳴 雪
 同
 四 明
 別 天 樓
 瀾 水
 北 涯
 五 工
 破 笛
 獅 子

舟

遊

早雲が兵を弄する穂麥哉
 馬盜む夕となりぬ麥の秋
 麥秋や月が出てたる麥の末
 短夜や既に江南の麥の歌
 灌佛もすぎし野寺や麥の秋
 麥の穂に背戸は雲雀の卯月哉
 中流に舟最合ひけり舟遊
 我名呼ぶ樓上の人や舟遊
 すれ違ふ肥舟にくし舟遊
 舟に弱き禿可愛し舟遊
 舟遊船頭同士の喧嘩かな

芙 蓉
 古 泉
 黒 洲
 田 庭
 甲 村
 薫 水
 霽 月
 同
 同
 同
 同
 同



竹 海 青
植 月 簾
取 取 簾
心 太
堯 酒

竹植えてこの石どこに置かん哉
降る雨に消ゆる思ひや海月取
烏帽子着て魚割く人や青簾
始むべき試樂の日なり青簾
白川や石工が軒の青簾
水盤に伸びたる蘆や青簾
酒煮るや雨となるべき夕曇
芥子の宿煮酒の灯宵々に
酒を煮る家訪ひよるや歌乞食
君が爲水汲み更へて心太
腹中の詩書冷かに心太

黒 吳 鳴 紫 露 甲 繞 紫 三 自 芙
洲 山 雪 影 石 村 石 人 允 適 蓉

鮮

眠た眼に的礫たりや鮮の魚
 しからきや鮮の一夜の山かつら
 鮮桶に汝の一句肯ひぬ
 趙州の筍偷み一夜鮮
 鮎の鮮青き山椒に齒を敲
 壓とれば同ト枕に鮎の鮮
 橘に一雨すぎぬ鮮の宿
 白雲のこゝにいつ来て鮮の石
 なれすぎていよゝ傾く鮮の石
 門外數僧過ぎて鮮なれたり
 卯の花の曉散るや鮮の桶

青 同 同 同 同 同 同 古 石 虚 薰

々 雪 夢 泉 泉 明 水

時 鈔

鳥

鈔に故郷思ふむせびかな
雨徒然忽然として時鳥
くらがりにマツチさぐるや時鳥
漁車を出て田圃の月や時鳥
鐘撞て庫裏に戻るや時鳥
時鳥きゝつゝ下る早瀬哉
ほととぎす一人世に住む月夜哉
月山の梢しづかやほととぎす
ラム子おく峠の茶屋や時鳥
時鳥ないて木の間の幟かな

亂鶯欺子規

橡面坊
露月
同
同
同
寒樓
同
同
同

ひが耳の我あざける歟時鳥
ほととぎすほととぎす草を見附けり
煩惱の落つく時や時鳥
鹿は寝て奈良の月夜や時鳥
聖堂に講話果てけり時鳥
時鳥古き木立の御陵哉
時鳥雲横はり月斜
時鳥晝の暗さをなきにけり
時鳥なくや初瀬のこもり堂
想思樹の花さく頃や時鳥
奈良は疾き曉起や時鳥

露石
同
愚哉
同
霞外
同
把栗
牛伴
別天樓
香墨
墨水

閑古鳥
青鷺
蝙蝠

時鳥銚の上なる京の月
蔀漏る短夜の灯や時鳥
時鳥晝を夢なる俳諧寺
蹉跎として遊子が夢や時鳥
時鳥桂を渡る祭人
曉の筈堀やほととぎす
松杉の古き都や時鳥
西塔へ下る阿闍梨や閑古鳥
青鷺や雨の桂を横に飛ぶ
かはほりや小庭明るき白菖蒲
かはほりや説客來る門の外
紫人
一蓑
逸夢
三允
薰水
松濱
露石
其雪
露月
瀾水

水鶏
水馬
鮎

水鶏鳴て水に三更の月落ちぬ
植付けて裏田に水鶏聞く夜哉
日が當る水馬の夢や菱の花
水馬毛虫も浮て流れ行く
短夜や皿に並べし鮎五六
水を出て短き鮎の命かな
夕されば泳人去て鮎はねる
瀬の鮎の類にはねて雲の峰
畚に死す鮎剃刀の如き哉
鮎かけや鄙に住ひて釣上手
鮎やくや都の客の歌もあれ
李村
田庭
露月
紫影
挿雲
同
同
同
同
同
碧梧
五工



火取虫
繭

繭買や取出す
衡紙の櫛
訪ひよれば思ふ
女の繭を選る
山宿は月の出遅し
火取虫
水草に雨の螢の
覺東な

柳露愚翠秋橡愚別露寒
家月哉浪星坊哉天樓月樓

初
鯉

尾を見せて鮎の逃け行く恨哉
貧交行

鮑叔に錢拂はせて初鯉
水の上に打ち落したる螢かな
初螢人にとられて仕舞ひけり
相照す蘭燈暗し螢籠

柳露愚翠秋橡愚別露寒
家月哉浪星坊哉天樓月樓

蚊

蚊を憎む嵐蘭が子をくふ蚊哉

潤水

晝の蚊や暗きお居間の水時計

同

蚊の聲や八手若葉の草の庵

碧梧桐

講法の耳を離れず鳴く蚊哉

墨水

子

子

子子の蚊となる水の別れ哉

秋蒼

子子の袖ふる戀もありぬべし

李村

毛

虫

花ちりし藤の若葉の毛虫かな

子規

人をして毛虫とらしむ庭の松

同

折りすてし萩の毛虫を踏みつけぬ

同

次の葉に渡らんとする毛虫哉

鳴雪

蟬

風颯と蟬吹飛す岡の松

牛伴

枝 蛙

蟬なくや侍町の桐一本
霧鳥に音なき雨や枝蛙
枝蛙小草楽しく鳴くなめり
同 同 青 女 葛 節
々

翡翠

雨にちる残の花や枝蛙
翡翠や淵冷かに松の風
咲 青
六 花

蚯蚓出

蚯蚓出で、雨蟻螂生れて風と卜す
三 允
三 允

雷

雷鳴て萩の若葉やうち震ふ
牛 伴
牛 伴

夏霞

但馬路や牛放ち飼ふ夏霞
楓 里
楓 里

霍亂

霍亂や卵の花下し未だ止まず
三 允
三 允

鹿の子

迷ひ行く鹿の子や神に導かれ
露 月
露 月

青梅

青梅のその上に鹽を量りけり
獅 子
烏 不 關 子

實櫻

梅の實や何日から落ちて鹵汁桶
秋 星
秋 星

杏

さむしろを敷けば實櫻落つる也
獅 子
獅 子

林檎

草の戸に林檎の紅や眺めぬる
芙 蓉
芙 蓉

瓜

瓜割いて壯士望郷の涙かな
虚 明
虚 明

葉は枯れて危うき蔓や種胡瓜

南山の盡る處南瓜島哉
同
同

三條を西に田舎や瓜畑

葉は枯れて危うき蔓や種胡瓜
繞 石
繞 石

瓜の花背戸に蛇見る山家哉

三條を西に田舎や瓜畑
五 虚 繞 同 虚 芙 獅 蜃 秋 烏 獅
工 子 石 明 蓉 子 樓 星 不 關 子



荊子
 瓠豆
 常盤木落葉
 凌霄花
 若葉

瓜畑や毛牖涼しき朝の露
 荊子買ふ押問荅や勝手口
 瀟湘に一夜泊りぬ荊子漬
 鄙言葉鄙珍らしき瓠豆哉
 辛崎や祭は過ぎて松落葉
 行水の中にちり込む松葉哉
 風渡る春日の森や杉落葉
 古き松に凌霄からみ赤き花
 盆栽の梧桐小さき若葉哉
 門内の梅の若葉や貸屋札
 溪に添うて蕃地につらく若葉哉

滴 瀾 虚 虚 露 牛 繞 繞 紫 同 香
 翠 水 明 子 石 伴 石 石 影 墨

夏木立
木下闇
若楓
茂

城外の苗圃に楠の若葉哉
蜘蛛の巢に露のしたゝる若葉哉
淺山の若葉がくれや藤遅し
魚つれずなりて目につく若葉哉
樹下に床几若葉の嵐吸はん哉
雨はるゝ香椎の宮の若葉哉
夏木立奈良の昔ぞ偲ばるゝ
里人の徑つくるや夏木立
木下闇身に入む瀧の尊さや
趣は橋にほとりす若楓
一門は皆四位五位の茂かな

同 把 墨 寒 古 田 愚 蜃 愚 子
栗 水 樓 泉 畝 哉 樓 哉 伴 規

殘花

木隠れに誰住む家ぞ殘る花

格堂

山鳥

山鳥の獨さびしき殘花哉

同

市中

市中や木深く住ひ殘る花

碧梧桐

陽炎

陽炎や雨後の日水に杜若

露石

杜若

杜若五月の闇を彩りぬ

吳山

香に

香にせまる花榻や青すだれ

笠堂

榻に

榻に落つる嵐や頼政忌

虛明

榻や

榻や簾かけたる長廊下

霞外

百合

白百合や曾てつゝトの山の坊

紅綠

花百

花百合や秣涼しき朝の門

同

花百

花百合に日盛り蝶も蛇も來ず

同

百合

百合の露こぼれんとする蝶斜め

同

僧に

僧にやる百合花さきぬ昨日より

同

百合

百合折つて安居の僧の下山哉

露石

閑古

閑古鳥山百合の根を堀り暮らす

紫人

身に

身に迫る谷の嵐氣や袂百合

翠浪

姫百

姫百合の花ちる頃を瘦せにけり

しま子

夏菊

夏菊に水打つ市の灯かな

別天樓

ゆり

ゆりすえて問はれ貌なり牡丹賣

青々

牡丹

牡丹賣とゝると踏みぬ淀の橋

同

置て

置てある貫ひ牡丹や小板敷

同

青竹

青竹の手すり廻せし牡丹哉

破笛

牡丹

牡丹賣とゝると踏みぬ淀の橋

同

置て

置てある貫ひ牡丹や小板敷

同

青竹

青竹の手すり廻せし牡丹哉

破笛

葵 紫陽花

剪り取て牡丹重たき心地哉
奢るもの文左が庭の牡丹哉
勅額を賜はる寺の牡丹哉
貧居士の狭庭に愛す牡丹哉
一日の雨に傾く牡丹かな
支那寺の門開きたる牡丹哉
紫陽花のやまざる雨に起きも得ず
雷はれて葵傾く夕かな
螢來る庭井に近き葵哉
葵咲けば鄙人醬油作りけり
白芥子に燭し葵に幕張らん

同 別天樓
香 墨
墨 水
烏 不關
南 子
繞 石
滴 泉
同 碧梧
芙 蓉

山 梔子
芥 子

花 柘榴

花葵干飯簾にからびたり
韓人の袖の廣さよ花葵
玳瑁の沓に葵の祭哉
嘴赤き鳩の下りゐる葵哉

祭

撫子の兒ぶり見せん葵の日
山梔子の浮世にうとく咲きにけり
廢園や芥子の花ちる竹の風
白芥子をめぐる蚊遣の烟哉
芥子の花まづしき家のあらはなる
花柘榴質屋の藏に迫りけり

六 花
よ し
さ み
ち か
鳥 人
柳 家
南 窓
同
吳 山
清 飄

風 蘭

風蘭や椎の嵐の軒に落つ

秋 星

柿 の 花

古寺やほろく^くとちる柿の花

把 栗

氷 室 櫻

眞清水にちりくる氷室櫻哉

秋 星

桐 の 花

静かなる鄙や藁屋に桐の花

烏 人

茨

晝しばし行人絶^ぬ花茨

五 工

蓮

魚を得て近路戻る茨かな

破 笛

蓮

蛇飛んで茨花ちる清水哉

樂 南

蓮

蜘蛛の園にかゝる埃や花茨

由 人

蓮

朝の戸に書き行く蓮の一句哉

古 泉

蓮

目の前に山明けてゆく蓮見哉

瀾 水

蓮

うかみ上る蛙の面に蓮がちる

墨 水

蓮

晝顔の砂濱稀に小松哉

少 狂

蓮

耳塚や夕顔の花二つ三つ

別 天

蓮

葉柳や家鴨飼うたる門の川

別 天

蓮

葉柳や寄席へ小路の二曲り

稻 青

蓮

若竹や西日にうとき寺の庭

愚 哉

蓮

若竹にありなし雲のゆき^し哉

笠 堂

蓮

河骨や田中の池の鐵氣水

別 天

蓮

氣味わるく浮草からむかち涉り

子 規

蓮

浮草を長く手ぐるや舟の中

同

蓮

浮草を長く手ぐるや舟の中

同

蓮

浮草を長く手ぐるや舟の中

同

蓮

浮草を長く手ぐるや舟の中

同

夏 草 筍 蒨

浮草の心中話やつゞき物
 夏草に江やある白帆遙か也
 蟻涼みかほなり蒨の下
 齒が抜けて筍堅く鳥賊こはし
 筍に木の茅をあはて祝ひかな
 提唱や筍飯の相國寺
 竹の子は竹となりけり郷戀し
 筍の數へ來れば多き哉
 筍や道山科へ藪つゞき
 筍や糞土の墻に尺あまり
 筍や蒨の根方に抜け出つる

同 六 松 子 同 北 四 同 子 松 六 同
 花 濱 規 明 涯 青 堂 蓉 泉

麻 水 飯

筍や餘花ふかれちる當歸島
 筍や金堀りあてん下心
 筍の裸すゝしや桶の中
 麻刈りて露にぬれたる女哉
 水飯や木曾の旅路の晝下り
 水飯や夏山せまる眉の上
 水飯や瀧にうたれし身のほめき
 風鈴の偶ま鳴るや釣り葱
 魚降りし市の樽や夏の霞
 藤躑躅夏猶淺き山路哉
 蛇川を渡りて夏に入る日哉

逸 清 甲 少 愚 破 清 繞 鳴 墨 君
 夢 飄 村 狂 哉 笛 飄 石 雪 水

釣 葱 雜

秋
近
氷屋の提灯焼けて秋近し
秋近く鱸のすしをつけにけり
南
子
樂
南

明治三十五年八月十九日印刷
明治三十五年八月廿五日發行

不許
複製

せみしぐれ奥附
金貳拾錢

編輯者 武定 珍七
發行者 大阪市東區南本町四丁目三十六番屋敷 金尾 種次郎
印刷者 大阪市東區鑪屋町二丁目七番屋敷 江間 傳三郎
印刷所 大阪市東區本町一丁目三十番邸 株式會社 大阪國文社

發兌所
大阪市東區南本町心齋橋筋角
金尾文淵堂書店

文藝圖書一覽

發兌元

金尾文淵堂本店

大阪市東區南本町四丁目(心齋橋筋角)

(電東 貳壹 七八)

新刊圖書

芝 肴
半月集

薄墨の松
蟬しぐれ

七日間下篇
蕪村(塑像)

尾崎紅葉氏作

芝肴

武内桂舟氏畫

芝肴目次

- 令夫人……………三章
- 倭字
- 胸算用……………
- 電話とビスケット
- 黒 紬……………四章
- 藪なる哉
- 金 盃……………
- 藥禮

寸價郵
珍金税
頗五金
美拾四
本錢錢

文淵堂の業務要項

出版
弊堂は専ら文學宗教書類の出版に従事し、材料の精選と印刷装釘の鮮麗堅固を期す、聊か世の出版業者流と其撰を異にするを信ず

原稿歓迎
故に親疎に不拘、紹介の有無に關せず、著者の聲名を以て其相談に應ずべし、希くは大方の諸賢幸に高顧を玉へ、其世に裨益ありと認るものは何種を不論之が出版を爲すべく、尙原稿を送附せらるゝ場合は、返稿返信及書留料を添附し原稿は必ず書留郵便を以て送らるべし、定期刊行物に對するものは各其規に従ひ玉ふべし

印刷製本
弊堂は弘く各種の製本印刷経験と便宜のあるを以て今後之が調製の引受を爲し、余力の盡し得る限り大方の便宜を計らんとす、其手摺料の如きは頗る僅少に其費の範圍を以て應ずべきを以て此事を與ふべきを信ず、其要項左の如き活版木版寫眞版コロタイプ版石版銅版の印刷書籍雜誌其他の印刷製本和洋各種の製本

賣買
弊堂は百種の書籍雜誌の發賣に従事し、其新古を論せず、弘く之が需要に應ず、尙各地出版者の其發賣方を托せらるゝ、あらば懇切に非常なる勵精を以て之が擴張を計るべし

注文注意
弊堂に注文せらるゝ方は著者書名册數其他の要項を尤明瞭に前金を以て玉はんことを要し、問合は返信料の封入を要す、取調の正確にして百種の書の調はざるなく、迅速に大方の便宜を計るべく、定期刊行物の發送は尤正確迅速を期すべし、送金は銀行爲替、郵便爲替(受取人欄内に小店名の記入を要す)郵券代用(一割増)各種其便宜に従ひ玉ふべし

市内注文
は電話、端書にて報せらるれば、即刻配達、大に大方の便宜を計るべく、(乙)宗教書目(丙)に二錢宛の郵券封入者近日發刊すべく、本書と共に尤も懇切正確に勵精すべく、爰に伏して大方諸賢高顧を希ふ

菊池幽芳氏著 坂田耕雪廣瀨勝平両氏書

再版 小 七 日 間

上下全二冊
各一冊 四拾錢
郵税各四錢

こゝに最も美にして最大膽なる最も狡獪にして最も機敏なる絶世の一佳人あり六尺有餘の男子一楸一碁せられつゝ相共に生死の境を彷徨す讀むもの心膽を寒ふせずんば止まず讀者を徹せしめその最後まで讀了せずんば安んずる能はざらむるもの蓋し本編の如きは無からん

菊池幽芳氏著 下村爲山氏新意匠空前の美裝

再版 よつちやん

コロタイプ版數葉
金四拾錢
郵税四錢

よつちやんは今年五つの子の兒で著者菊池幽芳君の令嬢ですが少の虚飾もなく眞率なる温かき同情の筆を以てその平生を詩的に書かれたるものでよほ趣味の深い冊子です兒童研究に志ある人には善き參考となり世の母たり妻たるものには如何ほ興味深く感ぜしむるでせうか恐らく一度この本を讀いたものはよつちやんの面影を長く思れることは出来ませぬこれにこの冊子の體裁の可憐に美しくい事はたかに出版界を驚かすに足るべきものと固く信ずる處です

高安月郊氏著

三連劇詩
其の第一

重 盛

製本高稚美麗

金參拾錢 郵税金四錢

中村不折畫
社會小説

金 字 塔

金四拾錢 郵税金四錢

新體詩集

夜 濤 集

金四拾錢 郵税金四錢

方今北歐の劇詩人イブセンを言ふもの多しイブセンを言ふ者は『イブセン社會劇』の譯者たる高安月郊氏を知らざる可からず氏平生鵬水の涯りに高臥し名聞を當世に需めず興會すれば乃ち筆を呵いて文を成す蓋し騷壇稀に見る高風の士なり上記の三著は氏の作劇詩、小説、新體詩集にして想は雲の如く高く筆は風の如く勁く人生に就いて疑問を有するの士は必ず一讀せざるべからざる也

薄田泣菫氏新體詩集

ゆ く 春

製本 頗美麗
金四拾錢 郵稅四錢

これは薄田泣菫氏の長短五十篇の新體詩を集めたるものに候挿畫には満谷國四郎君の彩筆になるコロタ
イプ版數葉ありヘエジの色刷輪廓は工學家松尾素濤君の新意匠に成り候へば見ては眼に美しく誦みては
心に清き慰藉と理想を與ふべしと信し候書肆は斯様の書を諸君に勧むるに遠慮を要せずと存し候

暮 笛 集

製本 頗美麗
金四拾錢 郵稅四錢

暮笛集の三版は体裁を改め工夫を凝らしたる新意匠を以て現はれ候卷中の詩も作者少なからず朱を加へ
候ゆゑ自然面目を新たにしたるもの有之候はんと存し候世の事物の日を經れば陳くなり行くが中に詩歌
のみは常に新らしく美しく候幸福なるは詩集を携ふる人と存し候ま、書肆は諸君に暮笛集を勧め候

湯淺吉郎氏著 湯淺一郎氏畫

新體 詩集 半月集

製本 頗美麗
金參拾五錢 郵稅四錢

半月集は出でたり
本書はヘブリウ學者として有名なる半月湯淺吉郎氏の詩集なり氏が名の明治新體詩史に缺く可から
ざる位置を有するは夙く己に「早稲田文學」記者の評せし所本集に載めたる古英雄の如きは外山井上諸
氏の一新體詩鈔に先づ數年の創作にかゝり材を舊約の傳説に採り英雄エホダの事蹟を歌ひたる叙事詩
にして無慮千行聲調壯麗雄健汪洋として大河の海潮に注ぐの概あり眞個明治詩界破天荒の大作として許
さる可き也此他家あり滑稽なるものには天地初發、黃泉門、七雷、神子と覽王あり温籍なるものには愛犬、天
然、新婚旅、秋田家あり滑稽なるものには百猿舞あり猿に寓して諸王出諷刺の妙を極む民衆が信仰思
想の喧しく論ぜらる、今日基督神學者として深遠の智識を有する氏が新體詩集を得るは徒に詩壇の幸福
のみにあらざる也表紙畫挿畫は氏の令甥湯淺一郎氏の彩筆に成り詩と相俟て幽麗の妙を極む

月刊 詩集 春 く さ

郵稅共 金拾五錢

第一集には佛國プレトンの畫を口繪に、十葉の色刷畫を挿み、薄田泣菫、三木天遊、高安月郊、山本露
葉、桑田春風、河井醉茗の長短の新體詩十二編と水落露石の俳文とを蒐む

與謝野晶子女史著 藤島武二氏書

詩集 みだれ髪

体裁 珍奇美本
金三十五錢 郵税四錢

構想に格調に變幻百出して、獨創の奇才優に新詩壇の一生面を開き、之に盛るに紅恨紫意炎々懊惱の熱情を以てするものは、我が國女史の歌にあらざるや。我が藤島先生の畫又最も進歩せる獨得の筆致を以て、最も清新なる特長の趣味を發揮せらる。日本刻下の文藝界に於て、能く最新、最美、最高の思想を代表せるものは即ち本書歟。

與謝野鐵幹氏著

紫

一冊 金三十五錢
郵税 金四錢

『太陽』記者大町桂月先生本書を評して曰く、『予輩は、在來の和歌に嫌らざるもの也。鐵幹此際に崛起して思想に格調に用語に、すべて古人の範圍を脱し、一生面を開きたるの新氣運は、後世より見るも、短歌史上の一大變遷也。鐵幹の短歌、奇才横逸、毫も舊典を帯びず、毫も古人の糟粕を管めず、其獨創の才、殆んど其比を見ず、鐵幹出づるに及んで、短歌の將來なほ有望なるを覺ゆる也。』と今や國時革新の潮流頗る急なるに當り、江湖の才人乞ふ本書に依つて更に發明せらる、所あらむことを。特に歐米の『珍本』を參酌して、奇抜なる製本の體裁、先づ人目を一新せしむ。

浩々歌客氏著 下村爲山氏表紙畫

文學 雜著 出門一笑

金參拾錢 郵税 四錢

文學 雜著 詩國小觀

金四拾錢 郵税 四錢

新案美術繪はむぎ

七枚一組 金貳拾錢 郵税不要

芝蘭集

金貳拾錢 郵税 四錢

『老僕とわれ』野花『風頭語』賣花翁等小品文數十を果め一篇無韻詩といふべきものなり紀行あり『讀』岐名勝の如きは好箇詩趣に富める讀岐の案内記なり『向上』一路『政行』勾花の如きは人生觀のある所を見るべし蓋し著者の詩想は理趣に繞むを以て長と一胸象に過るを以て短とすその人生と自然に涉りて一味の詩政感興深きは今日の文壇に在りてまた一家獨得たるを失はずといふべし卷末に東有爲の大同大平論あり南海の哲理の一斑を紹介したるものなほ著者が理を好む所を見るべし(大阪朝日新聞批評)

詩國小觀は趣味津津たる散文と韻文とを蒐めたる冊子也思想の健全なる著者の如きは當代の評壇稀に見る所此書を讀む者は其評眼を窺ひ知ると共に清楚流麗なる描寫に田園の詩趣を味ひて別乾坤に遊ぶの思あらん

此繪葉書は洋畫界に名高き滿谷畫伯の彩筆に成り紅顔花の如き少女に配するに春秋夏冬各季の花鳥風月を以てしたるもの考案の斬新色彩の豊麗彼の歐米繪葉書の優品に比して毫も遜色を見ず以て風流なる紳士貴女諸君が好事の用に供するを得んか

信仰、希望、長短、最幸、最非、天然、季節、人物、人品、聲色、書籍、花本、動物、器具、匾、銘の各欄にわかつて友の面影を一頁にのばしむる新案の金蘭簿也

水谷不倒氏著 ●口繪 土佐光起筆菅公神像古畫五十度摺木版極彩色

菅公實傳

坂田耕雪氏大版插畫四葉
金參拾五錢 郵稅 六錢

本書は大阪毎日新聞の紙上に連載して喝采を博したるもの、大阪毎日新聞社は之を其紙上に掲ぐる爲に著者をして殆ど半歳を費し其材料を蒐集し且つ菅公の遺跡靈社等を遍歴せしめたりといふ、宜なり近來菅公傳の著多く世に出るといへども本書の如く事實の正確に詳細を悉したるは稀なり、殊に著者は坊間流布する菅公傳の硬文にして普通の讀者に解し難く偶々文章の平易なるものあれば簡畧に失して有爾れたる事實の外公を知らざるを遺憾とし本傳を綴るには事實を史傳の正確なるに徴し而も乾燥無味に流れたる行文は平易明快を主とし學者も繙くべく無學者も手にすべく婦女童幼も雖も敢て難解を覺はざるに努めたるは本傳の特色にして菅公の事蹟を洽く世に紹介するに於て本書の如きは殆ど遺憾なきといふべきか

梅澤和軒氏著

菅公論

金參拾錢
郵稅 四錢

本書は菅公論の殿なり所論的確老吏獄を斷するが如く其井上高山大町諸氏の所説を批判す從横所説を批判せる眞に文壇の逸品なり今や菅公の一千年祭は來らむとす右流左死の眞相を窺はんと欲せば須く一本を座右に備へ給るべし

米山棟吉氏著 (肖像紀念碑コロタイプ版三葉挿入)

提督べりり

金參拾錢
郵稅 四錢

嘉永六年六月九日北米合衆國水師提督彼理の相州久里濱に上陸したるは即ち日本開國の曉鐘也宜なる哉昨年の七月十四日彼理上陸の一大紀念碑竣功の式を行ひ以て我開國の息壤とすたるや著者米山氏久しく米國に在り其在米中専ら西人の眼に映じたる日本開國當時の事情を詳論し贊て之を世に問ひ内外人の好評を博したり今回更に訂正補修して江湖に問へり其材料の豊富にして而かも文章の精妙なるを以て百讀手を釋く能はざらむるものあり吾人が此書を繙き今日に在りて過去の時勢と人物とを讀むの快感を感ずると同時に米國海軍の歴史と之に伴へる彼理の一生を知得し以て其則るべきものも尠からざるを覺ゆ(東京朝日新聞評)

小松原英太郎氏序
田邊爲三郎氏序
本山彦一氏跋
井土經重氏編

兒島灣開墾史

クロス綴上製金壹圓
西洋假綴金六拾錢
郵稅 六錢

本書は藤田傳三郎氏の經營に係る岡山下兒島灣開墾の歴史也。筆を地理の變遷、開墾の實例、津田永忠の遺業に起し開墾出願の競争、開墾の許可、其取消の請願、行政訴訟の顛末開墾の起工、關係地方との和解等を叙述したるものにして十餘年間岡下縣民が極力反抗せし光景紙上に活躍し、藤田氏が精神一到の氣魄目前に飛騰するを見る。若くも世に事業を爲さんと欲する者、本書を讀めば則ち志氣を激勵し以て成業に神補する所あらん。

芭蕉蕪村子規三家眞蹟下村爲山氏繪畫色刷十葉

春くさ
第二集

蟬

しぐれ

製本 頗美麗
金廿錢 稅郵不要

本書は天保以後腐敗し盡せる俳句界を一掃して新趣味の鼓吹に努め明治文學に俳句あるを知らしめたる子規、鳴雪氏等日本派自家の最新夏季類題俳句集也表紙及び挿繪は下村爲山氏の彩筆に成り句と相俟つて瀟洒の妙を極む青山緑り滴るが如く杜鵑聲頻りに落つるの頃這箇「蟬しぐれ」を繙いて詞人が清高の想を忍ば、一味の涼は先づ吹いて諸君が襟懐に入らむ
彫塑家山田泰雲氏作

蕪村翁塑像

高サ一尺弱
金三圓
小包(一貫匁迄)

山田泰雲氏は業を東京美術學校に受け彫塑の術に従ふこと多年頃研究修養の目的を以て俳句界の巨人與蕪村翁の半身塑像を造る材を月櫻其他諸家の筆に取り普ねく當今の俳人諸家の意見と斟酌し苦心經營數月にして漸く成るもの弊堂請うて之を取次販賣に任ず平生蕪村翁の句風を慕へる俳人諸家は須らく一個を求め机上に安置し朝夕其高風に私淑するを怠るべからざる也

俳諧叢書第一篇 第二篇 第三篇 第十一篇 第十二篇 第十三篇 第十四篇 第十五篇 第十六篇 第十七篇 第十八篇 第十九篇 第二十篇 第二十一篇 第二十二篇 第二十三篇 第二十四篇 第二十五篇 第二十六篇 第二十七篇 第二十八篇 第二十九篇 第三十篇

子規氏著書

俳諧叢書第一篇

俳諧大要

既刊第四版
定價貳拾錢
郵稅貳錢

俳諧叢書第二篇

俳人蕪村

既刊第三版
定價貳拾錢
郵稅貳錢

俳諧叢書第十一、二篇

俳句問答

全刊
定價各册廿五錢
郵稅各册四錢

俳諧叢書第十三篇

俳句界四年間

既刊
定價參拾錢
郵稅四錢

俳句を學ぶもの、爲に説く事丁寧周到、子規子進歩の跡を叙したる者にして亦同人進歩の跡を叙したる者、即ち俳諧の大道なり。

蕪村は古今の俳傑なり。本書は著者が多年研鑽の結果を公にし、蕪村をして九鼎大呂よりも重からしむ。

子規子が「日本」ホト、ギス」等に掲載したる問答体の俳話を輯む。上巻には「俳句問答」「試問及試問の答」、下巻には「或問」「隨問隨答」を收む。明治廿九年より三十二年に至る四年間は我新俳句進歩の歴史を劃す。之を指導し鞭撻したる著者が批評を輯めたる者にして實に此四年間の俳句史たり。附録として著者が鳴雪、飄亭、碧梧桐、虛子四作家を品評したる四章の文字を添ふ。

古人句集

ほととぎす發行所編纂

俳諧三佳書

●第三版
定價廿五錢
郵税四錢

俳諧三佳書は同人が常に棄て難く運座の席にも郊外散策の時に懐にする三個の書「猿蓑」「續明鶴」「五重反古」を集めたり。以て元祿、天明二盛期を代表せしむるに足る。

ほととぎす發行所編纂

太祇全集

●第二版
定價二十錢
郵税二錢

太祇、几董、召波、櫻良は天明の俳壇に立ちて蕪村如來を圍繞せる四菩薩なり。蕪村元帥の馬前に武者震ひして立ちほだかつたる四將軍なり。天明の俳句を研究せんとする者は、俳人蕪村、蕪村句集講義を讀め、既に俳人蕪村、蕪村句集講義に據つて蕪村如來の面目を明にす、乃ち此三書により四菩薩の句法を知らざる可けんや。

ほととぎす發行所編纂

几董全集

●第二版
定價二十錢
郵税二錢

明治新俳句の類題句集としては曩に民友社より發行したる「新俳句」の一篇あり。是れ明治二十八九年頃の俳句界を代表する者にして爾來五星霜、此間幾多の變遷を経、新聞「日本」ホト、ギス等に掲載せられたる句各季幾十万の多きに上る。此間正に二三の句集無かるべからざりし其擧無うして今日に至り、新俳句第二の句集として漸く爰に「春夏秋冬」あり、之を「新俳句」の例に徴すれば宜しく幾千頁の大冊たるべきなれど、選者の精嚴なる標準は僅に各季千三百余句を選ぶ。以て如何に其句々金玉にして如何に我が明治俳句の精華たるかを知れ。春之部は子規子の選になり、夏之部以下は其病重き爲め碧梧桐、虚子の兩人代つて之を選ぶ、

ほととぎす發行所編纂

召波櫻良句集

●第二版
定價二十錢
郵税四錢

夏之部は殘部既に多からず、若も俳句を嗜む者、明治俳句の何たるかを知らんと欲する者は一讀せざる可からず。

春夏秋冬

●明治新俳句の類題句集

子規選

春之部

●既刊第三版
定價廿五錢
郵税二錢

碧梧桐、虚子選

夏之部

●既刊
定價廿五錢
郵税二錢

明治新俳句の類題句集としては曩に民友社より發行したる「新俳句」の一篇あり。是れ明治二十八九年頃の俳句界を代表する者にして爾來五星霜、此間幾多の變遷を経、新聞「日本」ホト、ギス等に掲載せられたる句各季幾十万の多きに上る。此間正に二三の句集無かるべからざりし其擧無うして今日に至り、新俳句第二の句集として漸く爰に「春夏秋冬」あり、之を「新俳句」の例に徴すれば宜しく幾千頁の大冊たるべきなれど、選者の精嚴なる標準は僅に各季千三百余句を選ぶ。以て如何に其句々金玉にして如何に我が明治俳句の精華たるかを知れ。春之部は子規子の選になり、夏之部以下は其病重き爲め碧梧桐、虚子の兩人代つて之を選ぶ、

蕪村句集講義

春之部

既刊 第二版 定價三十錢 郵稅四錢

夏之部

既刊 定價卅五錢 郵稅六錢

冬之部

第二版 定價三十錢 郵稅六錢

凡蕪村句集を選むに當り之を前後の二編に分ち小祥大祥二忌追福の爲とするよ其跡に見ゆ。而して現存する處の蕪村句集は即ち其前編なり。鳴雪子規二先輩を始め同人等始めて此集を得てより日夕愛誦して今日に至る、其研鑽玩味の餘成る所のもの即ち此蕪村句集講義なり。明治卅一年冬より始めて卅四年秋に終る殆ど三歳の間根岸子規の虚に會して冬之部、春之部、夏之部を輪講し終り、其部度雜誌「ホト、ギス」に掲げたる者、各輯めて一卷となす。

寫生文

寒玉集

子規、碧梧桐、虚子文集 既刊 第一編 定價卅五錢 郵稅四錢

寒玉集

鳴雪、子規四方太、青々、碧梧桐、虚子、鼠骨文集 既刊 第二編 定價卅五錢 郵稅四錢

寸紅集

子規、虚子選 既刊 定價卅五錢 郵稅四錢

新囚人

寒川鼠骨著 既刊 定價卅五錢 郵稅四錢

美文を書くには寫生といふ事が尤も大切だ併し單に寫生といつただけではわかりにくい吾黨が寫生といふ斯んなものであらうと試み來つた者が編輯して「寒玉集第一編」及「第二編」を編んだのである寫生寫生若し此問題が諸君の頭に起つた場合には是非此書を読んで見て貰いたい又吾黨は「寸紅集」は燈、山、と云やうな題を出して短文を「ホト、ギス」紙上で募り子規等が之を選んだのである所謂寸鐵人を殺すと云様な面白味は此書の特徴である若し俳句が詩の一體として其短文の處に特色があつて面白く者である事を知つた諸君は亦文章に寸紅集の如き短文章の面白味を解せられるであらう。「新囚人」とは鼠骨が新聞社の代表人として獄に入り十五日間臭い飯を食た間の觀察を所謂寫生的にさうして言文一致で面白く書た者である獄中の事情は此書に由て極めて明白に描れてゐる社會、教育、宗教、文學の方面から此書は重きを置かれてゐる。

文藝社會雜誌

小天地

每月一回

十日發行

● 補 小 雜 評 文 社 譚 藝 寄 景

● 畫 說 錄 論 會 苑 書 報

● 小天地は小説、韻文、美文の創作評論を主とし、繪畫、音樂、演劇其他社會各方面に關する記事觀察を載する大雜誌なり
● 小天地は泣菫、浩々、抱月、雨外、蘆花、幽芳、鏡花、風葉、不倒、南翠、春葉、春雨、柳浪、眉山、不孤の諸名流あり

巧なる美麗なる繪畫書二枚若くは四枚と口繪の外毎號内外文壇諸名家の肖像を精
には文壇諸大家の傑作を掲げると共に大に新進作家を迎へ其舞臺を供するに勉
むべし
には諸名家の隨筆紀行などを載せ風流雅談の珍重する所たるに反かざるべし
には誠實穩當の見成りて忌憚なく時流の文學を批判す
には知名の諸家が筆に成りて溢る、如き清新の趣味を傳る韻文と散文とを載す
には記者自ら社會の各方面に投じ周到なる觀察眼を以て珍奇なる社會知識を供
し又時々の流行物をも精細に報道す
には一藝一能に秀づる士の實歴談及び各種有益有興味の譚草を載す
には演劇の主として各種技藝に關する秘微なる内幕と趣味ある記事とを載す
には小説家諸氏の筆論を各種小品詩俳句の秀什并に懸賞募集の披露を載す
には寄稿家諸氏の筆論を各種小品詩俳句の秀什并に懸賞募集の披露を載す
の報道をなす并に内外の著作出版業者の消息をもたらし

代

價

一 部
十二 册

前 前
金 金

貳 拾 錢
壹 圓 參 拾 錢
貳 圓 四 拾 錢

郵 稅 不 要
郵 稅 不 要

凡 一 割 増 の 事
郵 便 切 手 代 用 は

